

その、微笑まで。

—Doll in Our HOME 2—

ぶどろろり・くすこ

(三朗佐)

その、微笑まで。

—Doll in Our HOME 2—

ぶどろり・くすこ

(三朗佐)

とりあえずせつせと指を動かしている。脇目も振らずに動かしている。それを呆れ顔でみている肖と言うのも我が家では段々と馴染んでいる光景だ。

『至つてさあ…』

「ん？」

『ギャップが激しいって言われない？』

「口に出して言われた事は無いな」

暗黙の裡に頷かれた事なら幾度もある。大概渉と一緒にの時だけだな。

まあ、無謀と言えば無謀な話なんだ。一ヶ月以内に指編みで膝掛けを三枚編もうなんて言うのは。しかも俺ペースで。でも渉と俺とどっちがこう言う作業に適してるかと言うと、多分俺の方なんだよな。

別に膝掛けが手編みである必然性なんてないんだけどさ。なんかこう、ね。気持ちの形と言うか。

肖の《誕生日》を祝いたい気持ちを形にしたらこうなったんだよ、うん。肖にしてみたら野郎の指編み膝掛けなんてかなり微妙な気持ちかも知れんけど《家族》だし。

『ボクの奴さ』

「ん？」

『編み目、少し粗目が良いな。詰まり過ぎてると削られそうな気がして』

「そっか？」

『去年貰ったマフラーもあるしさ』

肖の気遣いに申し訳なくなりながらも素直に一口乗っておく。そう言うペースに変更すれば多分期間内には充分間に合う。余裕を作る為に多少根は詰めるけどね。

そう言えばわーちゃんに二度目に遣ったマフラー、結構くたびれてたな。いつそ解いて何かに編み直してやるかな。腹が冷え気味だつて言つてたから腹巻が良いかも。毛糸のパンツは俺の美意識が許さないので却下。

と、そこで会話終了かなと思つたらどうもそうじゃなかったらしい。肖が話したような心配を残したまま佇んでいる。だから俺も静かに待つ。俺達の様な発声器官を持たない肖にとつて改めて話を切り出すと言うのは結構一仕事だ。それだけ思う事が大きいという事なんだろう。と言う事は糸口探しに慎重になつて当然の事なのだ。

見当がついていない訳じゃない。

きっと肖の《誕生日》についての話なんだろう、とは思う。タイミングから考えてもそれが妥当だ。

でも敢えて話の糸口を肖に作らせる事にする。肖をこの家に連れて来たわーちゃん…渉が何も言わないまま時が過ぎ、そして肖が口を開こうとしていると言う事は、俺にだけ話したい事もあるんだろうと考えるから。

そう。肖は俺の連れ子でも渉の連れ子でもない。二人の遺子を人為的に掛け合わせて生まれた子供でもない。強いて言えば渉の養子である訳だが、俺にとつても子供みたいなもんだ。白木造りの球体関節人形だけど。

俺は全身の八割を耳に、残りの二割を指とその他にしてごくざく編んでいた。指編みの唯一と言つて良い難点は編みかけにするタイミングをとるのが難しい事だ。棒編みみたいに編みかけ差し掛けで置いておくという事が出来ないで出来れば時間を作つて一点ずつ仕上げてしまいたいと言うのが本音。大物は特に集中力があるし。マフラーはそう言う点で楽なんだよな。なんととなればメリヤス編みの掛け合わせで済む訳だから十分毎の作業と割り切る事も出来る。

いつそ作業を中断して話に集中してやるべき…じゃないだろうな。そう言う風に話せる感じならわざわざさう言うタイミングでこいつが声を掛けてくる訳がないんだ。現時点で俺のこつ言う作業を一番良く観察しているのは肖だから。ぶっちゃけ、

勢い任せな部分もあるんだろう。

とは言うものの、待ちの姿勢と言うのは案外に辛い。ツツコミを入れて話を進められる状況なら有難いんだが、肖の場合下手なツツコミを入れるとそれまでの会話記憶が吹っ飛ぶと言う実に厄介な弊害がある。まあ仕方ないわな。記憶中枢も記憶回路も無いんだから。だから待つしかない訳だが…おーい、オーラがどんどん重苦しくなってるぞ、肖よ。そのオーラで言いたい事が吹っ飛んじまったら元も子もないぞ？ 渉なら推理も頓智も利くが俺はその辺やばいんだからな？

…すう。

やつとの気配を感じ取つて俺はこぞとばかりに身構える。

おし。何でも言っちゃれ。何でも聞いちやるから。

『ボクつてさ』

ん？

『キモくない？』

…お前、俺が悩んでた小一時間を返せよ。どう言う文脈でそう言う言葉を引つ張り出してくんだよ。

「お前がキモいんなら俺等なんてどうするよ？」

意地悪に返してみる。うん。思いきり大人気ない。

『そっか、そうだよね』

納得するなよ！

一々会話でツッコまないのは一応こっちなりの配慮。それはそれで良いんだが、こいつには気の利いた、と言うよりも流れる様な日本語を教えておく必要があるかもな。感覚だけで会話するつてのは通じは早いんだが切り口如何によつては疲れると言うのを忘れてたわ。

『でも、渉と至はキモくないよ』

「そりやどーも」

『少なくともじっちゃんが心配した様な人達とは違う…』

「じっちゃんつて？」

『ボクを…生んでくれた人、つて言った方が良いの？合つてる？』

「体を創つた人つて事なら合つてるな」

心なしか肖が微笑んだ気がした。やろうと思えば肖は表情を作る事が出来る。但し自力ではなく外部からの操作によつて。これも多分(じっちゃん)の仕事の賜物だろう。肖の体は細部まで可能な限り人間の動きを再現出来る様に工夫されている。それは多分(じっちゃん)としては良心の表れだったのだろう。構造的に省略された部分も無いでは無いが。

『じっちゃんの所も気持ち良かったけど』

本当に、囁き声の様な感じで。

『この家も、とても気持ち良い』

そして沈黙。多分追憶に浸っているんだろう。こう言う時に紅茶の一杯も差し出してやれば良いんだろうが…まあ、仕方ないか。肖の膝掛けが編み上がっていたならまだ良かったんだけどな。

うん。この沈黙はさっきのものとは違つて心地良い。肖の背負つている空気が違うからこっちの気持ちまで解れるんだ。俺はまだ見ぬ(じっちゃん)にそつと手を合わせた。良い息子を生んでくれて有難う、と。

『渉に…初めて会つた時…この人は寂しい人なのかな、つて思つた』

肖がゆつくり手探りで言葉を紡ぎ出したから、俺は黙つて聞く事にする。多分これは俺の知らない渉の話だ。

『ボクと初めて顔を合わせた時の渉の表情、忘れない。あれ程優しくて、寂しそうな表情を見たのは二回目だった、から』

「そか」

『この家に来てから、妙に納得しちゃつた。一人だったから寂しかったんじゃないだね。二人だったから寂しかったんだね』

今だから、肖の言葉の中に含まれているものがきちんと判る。

でもあの頃の俺には判っていなかった。肖がこの家に来た冬…俺達が二人して勤め人になって二度目の冬。お互いへの想いが冷えていた訳じゃない。むしろ深くなっていたんじゃないかと我ながら思う。それなりに落ち着いても来たし。

でも、微妙な距離感と言うものが在った事は否定しない。それは強いて言えば俺達それぞれの個性と言うものから派生した差異の産物であり、初めてお互いの中に見出した違和感と言うものだったのだろう。

でも、あの頃の俺には言語化も出来なかったし増してや解決も出来なかった。渉にしてみた所で一緒だったと思う。その為に肖の存在がきつと必要だったのだろう。

そういう意味では肖は俺達の子供なのだと思う。

正直に言えばもう少し素直で小さいサイズの子供の方が俺好みではあるけど、それはそれとして目の前にいる肖は愛しい。家族愛と言う意味で。

仮に。もし仮に渉以外と恋愛をしなくちゃいけないと言う選択肢を提示されたら、多分俺は肖を選ぶだろう。肖になら愛されても良いと素直に思えるし。

でもそれはきつと恋愛じゃない。恋愛と呼ぶ事にした別の感情だろう。その一点だけは譲れないし譲ろうと思わない。

@ @ @ @ @

寝室を抜け出して居間に移動して、深く溜息を吐く。いっちゃん編み物で疲れた上に更に体力を消耗したのでなんだか気の毒だったけど、まあ自業自得って事で。好奇心は猫を殺すと言うし。ついでに肖はいっちゃんの部屋に移動させた。

なんだかなあ。肖を迎え入れた当座の件、今いっちゃんに聞かれてもどうでも良いっちゃ良いんだけどね。たどっても格好悪いよなとバツが悪くなるだけ。だから照れ隠しの意味も込めて念入りに愛して差し上げておいた。

で、改めて考えてみる。

確かにあの頃僕は一人で居ても寂しかった。それは否定しない。

ガキの頃はいっちゃんさえ居ればそれで充分僕の世界は満たされていた。心も体も通じ合う様になってからもその気持ちは強くなっていた。どんなにしんどくても二人になったら又歩き出す事が出来た。

でも、背広を着る事が日常になって暫く経ってから僕は満たされなくなった。いっちゃんを独占出来なくなったからではなく、多分僕の世界の面積が不本意にも広くなってしまったから。

そう、不本意にも。

いつちやんだけで満たされる世界で閉じ籠って居たいよなど八割方本気で思っていた人間にとつて、この事実は重過ぎる。こう言う感情を味わうんならモラトリアムだとかを鬱陶しがらんじゃなくて謳歌するべきだったのかも知れない。そしたら多分こう言う変化に慣れる事が出来たのだろう。

若しくは希求と欲求を混ぜこぜに、と言うよりも摩り替えて隙間を埋めてしまおうと言う手もある。否、試みようとした瞬間はあつた。で、結局実行出来なかつた訳だ。

じゃあ、希求をきちんとした形で埋める為にどうするかと熟考した上辿り着いた結論が、愛しむ対象を持つ事だった。但し無機物に限る。有機物の愛玩対象は至だけ居ればそれで充分だ。後は愛玩物と言うよりは世間として存在してくれればそれで良い。

しかしそこで大きな問題が発生した。僕自身が元々人形の類と相性が良くなかつたと言う事だ。はつきり言うると人形が怖かつた。どんな造りのものであつても何かを見透かされてしまつてそうで。鏡より怖い存在、と言えば少しは想像し易くなるかも知れない。

その状態から敢えて人形を迎え入れる選択をしたと言うの

は想像を伴う配慮の上だ。野郎二人暮らしの部屋に人形があるのは許容範囲だが、ぬいぐるみが存在すると言うのは……僕と至のキャラクターでは無理があり過ぎる。お互いのウエストがせめてあと十五センチ広かつたらぬいぐるみは許容範囲に入つていたかも知れない。種類の選択が難しくはあるが。

閑話休題。

そうして『彼』を迎え入れる決心はついたものの養子縁組に至るまで順調に行つた訳ではない。想像内とは言え少しだけ嫌な思いをせざるを得ない、そんな瞬間はあつた。

下調べを入念にしていざ店舗に行つたものの、こちらの要望を詳細に言うると一瞬怪訝な顔をされ、その後意味ありげな微笑を伴つて別種の愛玩人形の資料を提示される、なんて事を何軒で繰り返したか。ある意味間違つた選択では無いと思うが、どうせ薦めるなら何の感情も交えずに提示して欲しかつた。こう言う事で世間を恨んで立ち止まる程暇じゃないので良いんだけどね。まあ、自分の頭から血の退く音を聴けたり血の上の音を聴けたりしたのは希少な経験だからその点についても儲けものと思えば良い。何かの足しにはきつとなる筈だ。

いつそ諦めて頂好大聖のぬいぐるみで妥協しようかと言う悪魔の囁きが聞こえたのは細かい疲労が重なつたせいだろう。頂

好大聖ならまだ傍に置いてても違和感は少ないだろうな。基本は猿だし。フワフワ感と言うよりもモサモサ感が命だからまだ受け容れ易いかも知れない。

どうせ天使と縁が無い様なら悪魔の囁きに乗っってしまうかと踵を返しかけた時だった。視界の隅に引っかかったある風景。もしかしたらそれは天使が投げつけてくれた投げ縄だったのかも知れない。

煉瓦造りの小ぢんまりした店の窓から見えたのは滑らかな、そして柔らかそうな頬を持った少年。彼が人形であろう事は髪を感じから推測できたが彼の材質が判らない。樹脂系統でもセラミックでも無さそうな、そう言う艶やかさだった。

……こういう風に表現すると「親」の欲目だと冷やかされそうだが、基本的に肖の容貌は普通の人間の三割増し程度美化して創られていると僕は感じている。それがどうしてああ言う憎まれ口まで叩く馬鹿ガキになっちまったんだろう。とりあえずいつちゃんのせいと言う事にしておこう。

そんな事はどうでも良くて。

肖の容貌の原型が一体何なのか、肖を生み出した人に聞いた質した覚えがあるが答えて貰った覚えがない。でもようやくと先日尻尾を掴めた気になった。多分弥勒菩薩坐像の微笑をべ

ースにして阿修羅天立像の表情を幾分か配合したものなのだろう。あからさまに険しい表情は無いが、そう言う陰影も出せる様に工夫された部分もあるし。そう。あの時僕はその表情の不思議さに引き込まれてついと店に入ったのだった。表情だけではなく全体の佇まいをしっかりと見ておきたくて。

かくして傍でじっくり検分した彼は、相当に珍しい白木造りの球体関節人形だった。表情を浮かべる様に加工されているが白木仕上げと言うのは実際かなり珍しい筈だ。しかも驚くべき事に白木でありながら人の肌と同じ色合いになる様に材が吟味されている。

もしかして子供の頃にこの存在を知っていたなら、僕は人形嫌いではなかったかも知れない。それ程までの安堵感を彼は醸し出していた。

…幾ら追憶の中の事とは言え我ながら親バカが過ぎると思う。でもそう言う感情があったからこそ僕は肖の「親」になろうと思えたのだし。ただその時の感情を肖に見透かされていたのは不覚だった。あのクソガキの事だから絶対からかいの材料に一度は使うに決まってる。まだ使っていないのが少し怖いけど。

『彼を、気に入られましたか？』

肖がじつちやんと呼んだその人は僕の背中を軽く押してくれた。でも肖は彼にとつても大事な子供だった筈だ。そして僕には帰れば至が居る。肖に会いたくなればこの店まで来れば良いだけの話だ。そう僕は滔々と話していた。相手がこう言う関係に理解があるとか無いとか考え自分が躊躇ってしまう前に。

『じゃあ、余計この子が必要でしょう』

老匠は更に微笑を深くして肖の頭を撫でた。馬の尻尾の毛を一本一本植えたと言うしなやかな髪。その髪も静かにランプの灯を反射して輝いていた。

『でも、僕には』

『連れ合いは寄り添ってはくれますが溶け込んでくれるとは限りません。だから子と言うかすがいが時に必要なのですよ』
呟く様な論しの声。自分にも言い聞かせている様な静かな声。

『貴方と言う伴侶を得て、お連れ合いの方は相当に幸せだろうと私は想像します』

『あ、有難うございます』

『その貴方の心に、この子と暮らす事で更に深み加わればご家族でもっと幸せになる事が出来ると思わしますが、いかがですか？』

老匠は肖の手を取り、僕の掌に軽く重ねた。伝わってくる微かな温もり。それは心なしか段々強くなっていた。そして、肖と視線が合った。

『この子の名前を、教えてください』

肖が僕達と暮らす様になる第一歩は、こうして訪れた。

@ @ @ @ @ @ @

トン、と目の前に置かれた杯を認識して我に返る。杯からゆっくり視線を上げて行くと目の下に隈を作ったひねた悪戯小僧の顔があった。

「お早い回復で」

「一寸は手加減しろつての。教育に悪いでしょうがよ」

「良いんじゃない？そういう教育も」

「……本気で言ってる？」

「……ごめん」

「いや、良いけどさ」

仕草でせつつかれるので一献入れてやる。この悪戯小僧が見かけによらずかなりナイーブだとしっかり判ったのは肖を迎え入れてから後の話だ。それまでも傍に居たけど何処かで互いに

遠慮してしまっていた部分があつたのは否定しない。至が、と言
うよりは僕が一線引いてしまつてたんだな、きつと。高嶺の花を
射止めた気負いつて言うか。

杯一杯のワインをすする様にして呑んでいる連れ合いを観て
る自分の頬は今間違ひなくだらしなく弛んでいるだろう。そう
言う自分を嫌に思わなくなつたのも肖を迎え入れてから。肖
を通してお互いを視て、また少しずつ歩み寄れた、そんな気が
する。

「膝掛け、間に合うの？」

「間に合わせる。肖が氣イ遣つてくれたし」

「誰に似たんだらうね、そう言う点」

「俺でしょ？」

しれつと言われるとツツコミ所を見失つてしまう。言い返せな
い部分もあるからなあ。

「あ、そうだ」

「何？」

「今度の誕生日は、川の字な？」

「徹頭徹尾？」

「体温だけ、つてのもたまには良いっしょ？」

笑いかけられて浅ましくも当日穏やかに過ぐす為の逆算を

試みてしまう。健全な性悪ほど始末に負えないものは無い。で
もそう言う所も含めて、僕が選んだ伴走者なんだ、こいつは。
で、肖もね。そう言う連中と過ぐす日々はかなり嬉しい。

「了」

【電子書籍化にあたり本文を文字校正も兼ねて再入力】

奥付

「その、微笑まで。」

— Doll in Our HOME 2 —

【二〇一〇年二月二七日脱稿】

◆◆無償頒布◆◆

著者・発行者：ぶどううり・くすこ【三朗佐】

発行日：二〇一〇年三月二一日

WebSite <http://xqo.blog.shinobi.jp/>

E-mail xqo@desu.ne.jp

© 三朗佐 2010

印刷：福井タイプ印刷株式会社

<http://pageprint.jp/>

後書き

連作短編集「Doll in Our HOME」第二編、お届け致します。今回も初回同様現在と過去を往還しつつの話でございます。

やや抹香臭い展開かと思われませんが、これも筆者の考えた一つの解答です。こういうものもあるのかと思っただけならば幸いです。

それでは連作終了まで後二作、出来ましたらよろしくお付き合い下さいませ。御懐を煩わせぬ様無償頒布は続けます故。

その、微笑まで。—Doll in Our HOME2—

<http://p.booklog.jp/book/65856>

電子書籍版：2013.2.7 発行

改版：2013.5.7

著者：ぶどううり・くすこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/xqo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65856>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65856>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ